吉川英治著「宮本武蔵(五)」吉川英治文庫 52、講談社、1975 年 8 月 1 日刊を読む

開倫塾
塾長　林明夫

武蔵はふかく眠った。
　今、彼の眠っている小さい祠の廂には、浅間神社という額が見える。
　そこは高原の一部から、瘤のように盛り上がっている岩山の上で、この塩尻峠では、さし当って、ここより高い所は見当らない。
「おおうい。登って来いよ。富士山が見えるで」
　ふいに耳元で人声がしたので、祠の縁に手枕で寝ていた武蔵は、むっくりと起きあがって、いきなり眩い暁雲に眼を射られたが、人影は見えないで、はるか彼方かなたの雲の海に、真っ赤な富士のすがたを見出した。
「ああ、富士山か」
　武蔵は少年のように驚異の声を放った。絵に見ていた富士、胸に描いていた富士を、眼のあたりに見たのは、今が生れて初めてなのだった。
　しかも寝起きの唐突に、それを自分と同じ高さに見出して、対い合ったのであるから、彼はしばらくわれを忘れ、ただ、
「――ああ」
　というため息を胸の中に曳いて、瞬ぎもせず眺め入っていた。
　何を感じたのであろうか、そのうちに武蔵の面には涙の玉が転びはしっている。拭こうともしないで、その顔は朝の陽に灼かれて涙のすじまで紅く光って見えた。
　――人間の小ささ！
　武蔵は衝たれたのである。宏大な宇宙の下にある小なる自己が悲しくなったのであった。
　明らかに彼の胸を割れば、一乗寺下り松で、吉岡の遺弟何十名という数を、まったく自己の一剣の下に征服してからは、いつのまにか彼の胸にも、
（世の中は甘いぞ）
　と、ひそかに自負の芽が萌していた。天下の剣人と名乗る者は数あっても、およそ何程のものでもあるまいという慢心が首を擡げかけていた。
　だが。
　たとい剣において、望むがごとき大豪となったところで、それがどれほど偉大か、どれほどこの地上で持ち得る生命か。
　武蔵は、悲しくなる。いや富士の悠久と優美を見ていると、それが口惜しくなってくる。
　畢竟、人間は人間の限度にしか生きられない。自然の悠久は真似ようとて真似られない。自己より偉大なるものが厳然と自己の上にある。それ以下の者が人間なのだ。武蔵は、富士と対等に立っていることが恐くなった。彼はいつのまにか地上にひざまずいていた。
「……」

そして合掌していた。
合わされたふたつの掌を通して、彼は母の冥福を祈った。国土の恩を感謝した。お通や城太郎の無事を祈った。また神の天地のごとく、偉大なるわけにはゆかないが、人間として、小ならば小なりに偉くなりたい――と自己の希望をも心のそこで祈った。
「……」
なお、彼は掌をあわせていた。
すると、
――ばか、なぜ人間が小さい。
と、いう声がした。
――人間の眼に映って初めて自然は偉大なのである。人間の心に通じ得て初めて神の存在はあるのだ。だから、人間こそは、最も巨きな顕現と行動をする――しかも生きたる霊物ではないか。
――おまえという人間と、神、また宇宙というものとは、決して遠くない。おまえのさしている三尺の刀を通してすら届きうるほど近くにあるのだ。いや、そんな差別のあるうちはまだだめで、達人、名人の域にも遠い者といわなければなるまい。
合掌のうちに、武蔵がそんな閃きを胸に享けていると、
「なアるほど！　よく見えらあ」
「お富士様が、このように拝める日は、すくのうございますよ」
下から這い上がって来た四、五名の旅人たちが、手をかざして、ここの景観を称え合っていた。その町人たちの中にも、山を単なる山としている者と、神として仰ぐ者と、自らふたつあった。

P167 ～ 170

＜コメント＞
吉川英治著名作　宮本武蔵（第五巻）「風の巻」と「空の巻」。いよいよ物語の後半、宮本武蔵の人間模様があきらかになってきます。是非、御一読を。

2024 年 12 月 20 日（水）